

【1】地方独立行政法人知多半島総合医療機構の設立に至る経緯

半田市立半田病院と常滑市民病院は、これまでも半田常滑看護専門学校への協力、職員の人事交流、両病院相互の円滑な患者紹介等、さまざまな連携を進めてきました。

全国的に医師不足などの課題がある中で、働き方改革による労働時間の制約等により、今後医師の確保がさらに難しくなることが予想されます。

そのような状況の中で、半田市立半田病院は新病院建設、移転に伴い、常滑市民病院と近接することとなり、今後限られた医療資源（医師等の医療従事者や医療機器、医療薬等を指します）を効率的に活用し、地域医療を守り、効率的で質の高い医療を提供し続けられるように、両病院は経営統合することとなりました。

半田市と常滑市が新たに地方独立行政法人知多半島総合医療機構を設立し、その機構が両市と連携して、2つの病院を運営することとなります。このような運営方法に変わることによって、これまで以上に2つの病院の連携を強化することが可能となります。2つの病院それぞれの役割分担や診療機能の集約を行い、医療従事者の働き方の効率化や医療機器等の集約を図ることで、効率的な病院運営ができ、最終的には患者サービスの向上につながります。

【2】現在の両病院のイメージ写真

【半田病院】



救急医療

24時間、365日、周辺医療機関と連携しながら受け入れている



DMAT隊

災害急性期に活動できる機動性を持ったトレーニングを受けた医療チーム



新病院イメージ

令和7年春の開院に向けて、建設中

【常滑市民病院】



特定感染症受入れ（訓練）

空港の直近病院として、未知の感染症のまん延を水際で防ぐ



健康講座・市民講座

健康を維持するために、様々な教室を開講（写真は「世界糖尿病デー」の様子）



地域包括ケア病棟

在宅復帰に向けて診療・看護・リハビリを行なうことを目的とした病床

【3】両院長の想いについて

半田市立半田病院長 渡邊 和彦（わたなべ かずひこ）

現在の半田病院は知多半島やその周辺に住む約60万人の医療を担う病院となっています。当院の特徴としては、脳卒中や心筋梗塞などの病気や交通事故等による深い外傷を負った方など、生命に関

わる重症な患者を 365 日、24 時間体制で受け入れていることです。周辺地域における救急医療の最後の砦として、当院は年中無休で皆様の健康を支えられるよう、日々がんばっております。

このたびの新病院建設、移転に至った理由は、いくつかありますが、その中でも、「南海トラフ巨大地震」のことが挙げられます。当院は、現在も愛知県の災害拠点病院の指定を受けており、災害対策の中心的な存在ですので、災害時に備え、定期的に訓練をしています。災害時に皆様が抱える不安を少しでも減らすことができるよう、新病院は、南海トラフ巨大地震で予想される最大震度にも耐え得る病院となる予定です。また、ヘリポートも設置しますから、知多半島のどこからでも緊急搬送できるようになります。

新病院の建物は立派になっても、やはりそこで働く職員も成長していかなければなりません。私として、特に重要だと思っているのはコミュニケーションです。患者さんに対するコミュニケーションはもちろんとして、その家族、一緒に働く職員同士、他の病院との連携、すべての場面において円滑なコミュニケーションは重要なものとなってきます。

今回のシンボルマークの作画については、非常に難しいと思いますが、個人的には円滑なコミュニケーションやどこか温かみを表現できるようなものであったり、逆にこれからの知多半島の医療をずっと守っていくぞというような、カッコいいマーク、そのようなイメージでぜひ皆様のお知恵を借りられないかと思っておりますので、何卒宜しくお願い致します。

常滑市民病院長 野崎 裕広 (のざき やすひろ)

常滑市民病院は、常滑市で唯一の総合病院として、急な病状を治療する救急医療だけではなく、病気や入院のために起こってしまう生活力の低下に関して不安がなるべく少なく自宅へ戻れるようにするための回復期医療やそれを支援する自宅への訪問看護の体制や、知多半島でも最大級の人工透析センターで腎臓機能低下の方の社会支援、これからの日本の活力の底支えともなる不妊治療、また、皆さんの健康寿命を延ばすべく健診部門など様々な機能を併せ持ち、細やかな視点で地域の皆さんの暮らしを守っています。また、海外から持ち込まれるかもしれない未知の感染症に対応するための特定感染症病床を持った、日本には 4 つしかない特殊な感染症指定医療機関としての働きもしています。最近では、新型コロナウイルス感染症の治療に対しては、知多半島全体を中心とした愛知県在住の方の感染拡大後の治療は勿論ですが、セントレア空港・名古屋港を経由して来日される方に対しても、感染症としての脅威が未知の段階であった水際対策の頃から取り組みを始めていました。

さて、半田病院の移転に伴い、令和 7 年 4 月に常滑市民病院は、新半田病院と、一つの知多半島総合医療機構として機能を果たし、より広い範囲にお住まいの皆さんに細やかで安心できる医療を提供していきます。このような両病院の特徴的な医療サービスの連携は、両病院のすべての職員が同じ気持ちで職務に向かう事が前提であると考えています。シンボルマークから、知多半島総合医療機構に対する皆さんの期待感と“繋がる”こと、また、機構を構成する両病院間の“繋がり”が連想できる、わかりやすく洗練されたものができたらなと考えています。法人としての特色を示せるこれぞといえるシンボルマーク誕生のために、皆様のアイデアをいただければと思います。よろしく願いいたします。